

保育課程とその編成

大 坪 祥 子

A Study on the Childcare Curriculum

Shoko OTSUBO

I. はじめに

保育所保育指針が平成20年3月に厚生労働大臣告示として定められ、平成21年4月より施行である。今回の改定で、さらに保育所の果たす社会的な役割が明確になり、保育の質の向上についてもより一層求められているところである。

保育の質を高めていくことについては目の前にいる子ども達に対して行われる日々の保育を充実することが大事であり、そしてそれは、保育の一連の流れである「計画」→「保育の実践」→「記録」→「保育の反省・評価」→「改善」の循環がスムーズに行き、且つ充実していくことであると考えてる。

「計画」は入所する子どもの全期間を見通した「保育課程」（平成20年改定より）、保育課程を基に長期の指導計画である年間指導計画・期間指導計画・月間指導計画が作成される。そして、長期の指導計画を基に短期の指導計画が作成され、週の指導計画・日の指導計画が作成される。今述べたようにすべての計画の上位に位置づけられているものが「保育課程」である。今まで「保育計画」と呼ばれていたものが、(今回の改定で幼稚園との整合性もあり)、「保育課程」と呼ばれるようになり、保育所は各々独自のものを編成していくこととなった。

そこで、今回は指導計画を立てるにあたってその基になる「保育課程」をどのように編成していったら良いか、考えていきたい。⁸⁾

II. 保育課程の意義

1. 保育課程とは、どのような意味・内容を持つものなのか。

保育課程という用語が公的に用いられるようになったのは、平成20年3月28日厚生労働大臣による保育所保育指針の告示で、初めて明らかにされた。

「保育課程」という言葉は、教育課程同様、学校教育という外来語の“カリキュラム”に当たると考えられる。

そして、保育課程の定義づけにおいては、いろいろな解釈・見解が見られるが、その代表的なものをあげると、おおよそ次のようになる。

- ① 保育課程とは、子ども達の学習のコースである。
- ② 保育課程とは、保育所での指導の下に、子ども達が行う諸経験、または諸活動の全体を意

味するものである。

③ 保育課程とは、子どもがその発達過程で、どんな活動を行うのが適当であるかを定め、その活動の内容・種類を発達過程別に配当づけたものである。

④ 保育課程とは、子ども達が望ましい成長・発達を遂げるために必要な諸経験を彼らに提供しようとする保育所保育の全体計画である。

それぞれ表現やニュアンスの違いはあるが、どの解釈・見解にも共通していることは、保育課程が「保育所における保育所保育の全在籍期間を見通した全体計画」だということである。

このようなことを参考にしながら、新保育所保育指針とその解説書の記述を要約してみると、保育所における保育課程とは、①児童福祉法や子どもの権利条約、保育所保育指針などの保育の関係法令等に基づき、②自園の保育目標の実現を目指し、③子どもの心身の発達の実態や子どもを取り巻く家庭の状況、④自園、地域の状況などを踏まえ、⑤保育期間の全体にわたって、⑥どの時期に、どのようなねらいを目指して、どのような指導を行ったらいかがが全体的に明らかになるように、⑦具体的なねらいや内容について一貫性をもって組織し、⑧入所するすべての子どもが充実した生活が展開できるような全体的な計画である。

つまり、幼稚園で言えば、園における1年間（1年保育）や2年間（2年保育）並びに3年間（3年保育）であるが、保育所においての契約は単年契約とはいうものの、6年間、5年間と在籍することを考えると、その期間を通した保育所保育の全体像、並びに、その保育所の保育目標実現のための基本を示したものであるということができる。

2. 保育課程はどのような条件を踏まえ、どのような手順で編成すればよいのだろうか。

① 保育課程の成立要件をしっかりと踏まえておくこと。

保育課程が、「保育課程として成立する」ためには、いくつかの要件（※1）が考えられる。この要件には、いろいろな考え方があるが、それらに共通し、最低必要と考えられる事項を示すと次のようになる。

ア. 関係法令・法規（その中で最も大切なものが保育所保育指針）に準じたものであること。

イ. 子どもの心身の発達に即したものであること。

ウ. 園の実態に即したものであること。

エ. 保護者・家庭・地域の実態を踏まえたものであること。

オ. 園における保育目標の実現を目指す全体的な計画であること。

※1 要件というのは、その中のどれか1つでも欠けてはいけない、その全部が揃って初めて保育課程ということができるという意味である。

② 保育課程の必要性について

保育所の保育の基準は幼稚園との整合性を図るため公の性質を有する（教育基本法第6条）ものであることから全国的に一定の教育水準を確保し、全国どこにおいても同水準の保育を受けることのできる機会を保障する（教育基本法第3条）ことが要請されている。

このため、保育所の保育の目的や目標を達成するためには、各保育所がある程度において国全体としての統一性を保つために設けられた保育所保育指針に基づいて、保育課程を編成し、実施することが必要である。また、子ども達の発達の方向性をしっかり把握し、子ども達の育ちに対して、必要な経験を十分にさせてあげることができるよう、保育課程を編成していかなければならない。

保育はその本質からいって、地域や園の実態並びに子どもの心身の発達段階や特性に応じて、効果的に行われることが大切である。そのためには、国として必要な、最低限度の基準に従いながらも、それぞれの園が創意工夫を加え、主体的に保育課程を編成し、実施することが必要であることはいうまでもない。

③ 保育課程はどのような手順で編成すればよいだろうか。

保育課程編成の手順についてはさまざまなものがあり、また、一定したものがあるというわけではないが、いずれにしても1の「保育課程の成立要件」は十分満たしたものであることが必要である。

ここでは、厚生労働省の保育所保育指針解説書の「保育課程編成の手順について（参考例）」を参考に編成の手順を具体的におってみる。²⁾

ア．保育所保育の基本について職員間の共通理解を図る。

i．児童福祉法や児童に関する権利条約等関係法令を理解する。

保育課程に関する法令・法規の主なものをあげると、次のようになる。

a．日本国憲法

- 前文
- 第11条……基本的人権
- 第12条……自由及び権利の保持義務と公共福祉
- 第13条……個人の尊重
- 第14条……平等原則・貴族制度の否認、栄典の限界
- 第23条……学問の自由
- 第26条……教育を受ける権利と受けさせる義務

b．教育基本法

- 前文
- 第1条……教育の目的
- 第2条……教育の方針
- 第3条……教育の機会均等

- 第6条……学校教育
- 第8条……政治教育

c. 学校教育法（昭和22年法律第26号）

d. 児童憲章

昭和26年5月5日

e. 児童福祉法

- 第1条第2項……児童福祉の理念
- 第7条……児童福祉施設
- 第18条の4・5……保育士
- 第18条の6……保育士の資格
- 第18条の18・19……保育士の登録、登録の取り消し
- 第18条の22……秘密保持義務
- 第39条……保育所
- 第45条……最低基準の制定等
- 第46条の2……児童福祉施設の長の義務
- 第48条の3……保育所の情報提供等

f. 児童に関する権利条約

- 第3章第1項……「子どもの最善の利益」

g. 児童福祉施設最低基準

第5章

- 第32条……設備の基準
- 第33条……職員
- 第34条……保育時間
- 第35条……保育の内容
- 第36条……保護者との連絡

ii. 保育所保育指針、保育所保育指針解説書の内容を理解する。

a. 保育所保育指針

平成20年3月28日 厚生労働省告示 第141号

※ 平成21年4月1日 施行

b. 保育所保育指針解説書

平成20年5月13日

イ. 各保育所の子どもの実態や子どもを取り巻く環境・地域の実態及び保護者の意向を把握する。

i. 子どもの実態

a. 入所前の子どもの実態（成育暦・保育暦など）…生活調査・質問紙法等による。

- 妊娠中、出生前後の状態
- 在胎期間と母体・胎児の状態
- 出産時の母児の状態
- 乳幼児期の発育・発達・栄養の状態(定頸、歩行、始語及び喃語、発声の月齢、人見知り有無)
- 生活環境の変化
- 集団生活歴等

b. 入園後の子どもの実態（子どもの行動様式）…直接観察法による

捉えようとする時期としては、入園当初の緊張が解けて、子どもが一応本来の姿を発揮するようになる6月頃が適当と考えられる。観察項目としては、基本的生活習慣に関するものと活動への取り組みに関するものの2つの面が考えられる。

○ 基本的生活習慣に関するもの（3歳児以上の場合）

＜食事に関すること＞

- ・手洗いうがいの際の水道の使い方、後始末は正しくできるか。
- ・いろいろな食材を進んで食べようとしているか。

等

＜睡眠に関すること＞

- ・午睡や休息を自ら進んでしようとするか。

等

＜排泄に関すること＞

- ・便所には適宜自分で行くことができるか。
- ・自分の排泄の後始末ができているか。
- ・便所を上手に使えているか。

等

＜衣服の着脱に関すること＞

- ・自分で衣服の着脱ができるか。
- ・衣服の着脱の順序がわかるか。
- ・気候や活動に合わせて適宜調節できるか。
- ・だらしない服装、汚れた服装でないか。

等

＜清潔に関すること＞

- ・顔や手足を清潔にしているか。
- ・不潔なものを口に入れていないか。

- ・怪我をしやすいかどうか。

等

<その他>

- ・持ち物をロッカーなどに正しく納めたり、整理したりできるか。
- ・道具などの使い方など乱暴に扱っていないか。
- ・独り占めしていないか。
- ・後片付けはどうか。

等

○ 活動への構えに関するもの（3歳児以上の場合）

- ・リズム遊びや紙芝居、テレビ視聴などクラス全体の活動に喜んで参加しようとする者はいるか。
- ・外遊びを好まない者はいるか。
- ・運動遊びの後、疲れやすい者はいるか。
- ・乱暴な行動や危険な行動をする者はいるか。
- ・自由遊びで、自分から遊ぼうとしない者はいるか。
- ・保育士の話を正しく理解できていない者はいるか。

ii. 子どもを取り巻く家庭の実態

- ・家庭の状況
- ・家庭の文化的状況
- ・環境の変化
- ・親子関係
- ・親の教育観

iii. 家庭における子どもの実態

このことに関しては、母親から「家では、本当に甘えん坊で心配しているのですが…」といった相談（声）を受けることがよくあるが、このようなことを、可能な限り客観的に把握することも大切である。

こういった実態を把握する方法として、次のような調査事項が考えられる。

- ・眠っていた（昼寝の時間を含む）
- ・ごはんを食べていた。
- ・保育所にいた。
- ・稽古ごとをしていた。
- ・テレビを見ていた。
- ・絵本を見ていた。
- ・絵・製作などをしていた。
- ・ピアノ・踊り（稽古ごとを省く）をしていた。

- ・外へ出掛けていた（親と一緒に行動を共にした時間も含む）。
- ・その他（以上のどれにも該当しないこと。できるだけ詳しく）

以上の各調査項目に従って、時間を追って（日・祝を含め）調べれば（４日間程度）、家庭における子どもの生活実態をほぼ捉えることができる。

iv. 園生活に対する保護者・地域社会の関心・期待・要請・評価の実状

この項目についての実態把握は、各園における経営の最大の関心事であると考えられる。しかし、この項目が地域的な実情などとあいまって、一定の形式や調査項目によつて的確な把握は非常に困難なことが予想される。それだけに、それぞれの園の創意工夫による実態把握が必要になってくる。

v. 地域の実態

地域の実態は、子どもの通所区域を中心にしたものと、その周りを取り巻いている地域の２つについて、地理的・自然的・歴史的・社会的・経済的（商業的）・教育的・文化的な諸条件を多角的・総合的に捉えておくことが必要である。

a. 通所区域

- ☐ 子どもの家が比較的地域（小学校の学区ぐらい）にあるか、もう少し広いか。
- ☐ 住宅が密集しているか。
- ☐ 古くから住んでいる人が多いか。
- ☐ 団地はあるか。
- ☐ バスを使わないと駅に出られない地域かどうか。
- ☐ 交通量の多い道路はあるか、またそれは保育所に近いか。
- ☐ 騒音はどうか。
- ☐ 繁華街はあるか。
- ☐ 公園・児童遊園地など遊び場に恵まれているか。
- ☐ 自然環境に恵まれているか。
- ☐ 児童館・動物園・植物園などの施設があるか。

b. 通所区域を取り巻く環境

- ☐ 近年、都市化が進んでいる地域か。
- ☐ 繁華街はあるか。
- ☐ 自然環境に恵まれているか。
- ☐ 園外保育に適当な場所があるか。

ウ. 各保育所の保育理念、保育目標、保育方針等について共通理解を図る。

保育所の保育目標の設定や保育課程の編成・実施に当たつての重要な条件として、子どもの実態、保護者、家庭、地域の実態、園に対する期待・要請などを的確に把握し、資料

そして、保育所の実態とあわせて、保育所の教育的課題を明らかにし、保育所の保育目標の設定や保育課程の編成に具体的に反映させていくことが大切である。

i. 保育所の実態

- ii. 保育所の保育目標を設定し、その具現化を図るにはどのようにすればよいのだろうか。

- a. 保育目標の具備すべき要件や保育目標の意義をよく理解しておく。

＜保育所の保育目標の具備すべき要件＞

それぞれの園における保育目標が関係法令・法規に基づきながら、目標として十分に機能するためには、次のような要件を具備していることが必要である。

- ① 公教育の立場から、関係法令・法規に示される保育所保育の目的・目標の達成を前提とするものであること。
- ② 子どもの実態、家庭・地域・園の実態に即したものであること。
- ③ 保育士の願う乳幼児像が反映されていること。
- ④ 教育的価値が高く、継続的な実践が可能であること。
- ⑤ 評価の基準となり得るような具体性を有するものであること。

＜保育所の保育目標の意義＞

— 52 —

が大事である。

※ 園における保育目標はその園がどのような教育を目指しているかを公に示したものであるとともに、保育士にとっては園の教育に対する共通の指標となるものである。したがって、その表現はできるだけ正確に、すべての保育士に共通のイメージを与え、印象深くかつ簡潔な文言であることが望ましいといえる。

また、子どもの努力目標としての性格をもたせた場合は子ども主体に考え、子どもにとってできるだけ親しみやすく、印象深い表現にすることが必要になってくる。

しかし、いずれにしても表現が簡潔であるために、抽象的、一般的になるのは避けたいことである。

b. 保育目標はどのような手順で設定すればよいのだろうか。

保育目標の設定に当たっては保育目標の具備すべき要件、並びに保育目標の意義などに基づき、イの方法で把握した子どもの実態・保護者・家庭・地域の実態と保育所保育に対する保護者・地域の期待・要請などを客観的に捉え、自園の実態とあいまって、園自体の教育的課題を明らかにし、保育所保育の一般的な目的・目標や自園の保育の理念に照らして、園の保育目標を設定することになる。

保育の目標(保育所保育指針 第1章 3. 保育の原理 より)¹⁾

1. 保育所は、子どもが生涯にわたる人間形成にとって極めて重要な時期に、その生活時間の大半を過ごす場である。このため、保育所の保育は、子どもが現在最も良く生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培うために、次の目標を目指して行わなければならない。

(1) 十分に養護の行き届いた環境の下に、くつろいだ雰囲気の中で子どもの様々な欲求を満たし、生命の保持及び情緒の安定を図ること。

健康、安全など生活に必要な基本的な習慣や態度を養い、心身の健康の基礎を培うこと。

(2) 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、そして人権を大切にすることを育てるとともに、自主、自立及び協調の態度を養い、道徳性の芽生えを培うこと。

(3) 生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと。

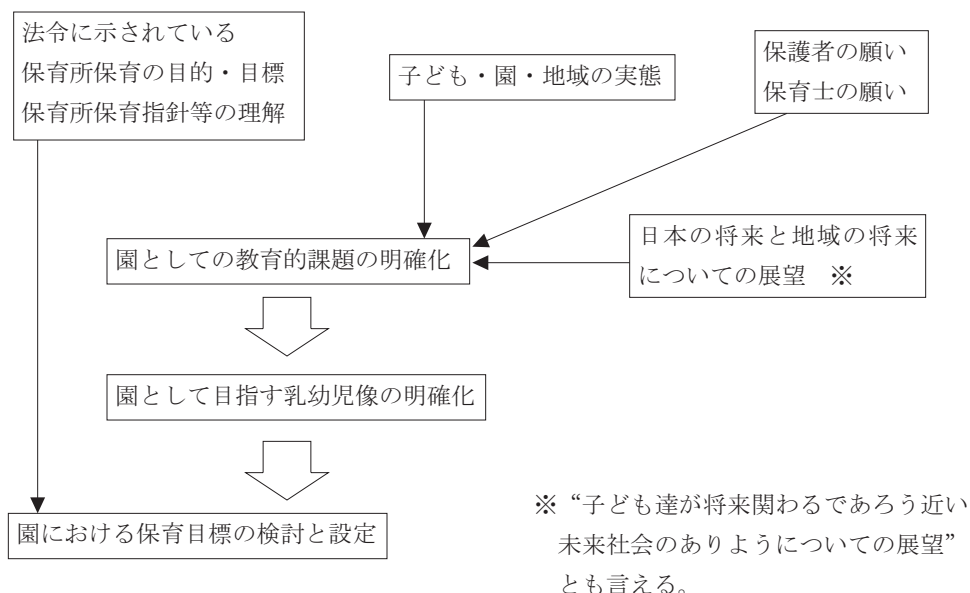
(4) 生活の中で、言葉への興味や関心を育て、話したり、聞いたり、相手の話を理解しようとするなど、言葉の豊かさを養うこと。

(5) 様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。

2. 保育所は、入所する子どもの保護者に対し、その意向を受け止め、子どもと保護者の安定した関係に配慮し、保育所の特性や保育士等の専門性を生かして、その援助に当たらなければならない。

しかし、具体的設定の基準についても一定の形式といったものはないが、その中の一例を図示してみると次のようになる。

【園における保育目標設定の構想・手順】 図 1



保育目標を保育課程の編成や保育の実際（保育課程の実施）に機能させ、その具現化を図るにはどのようにすればよいのだろうか。

保育目標は、その性格上、表現が一般的・抽象的になりやすく、そのため具体的な保育実践と結びつきにくい面をもっている。

しかし、保育という仕事そのものは、極めて具体的・実地的なものである。したがって、保育目標の実現を目指す保育課程の編成と実施に当たっては、その前提として、保育目標の分析を行い、その具体化を図ることによって、日々の保育実践の指標となるようにすることが必要になってくる。

そのためには、

- a 保育目標の内容（保育目標に含まれている教育的価値～子どもに育つことが期待される心情・意欲・態度）をいくつかの要素に分析し、具体的なイメージがもてるよう、指標化することが必要。
- b 保育目標を修了時まで子どもが実現するには、どのような段階でどのように実現していくか、という目安を明らかにすることが必要。

保育目標を分析する方法としては、いくつか考えられるが、ここでは2通りの方法を例として取り上げることにする。

●例) 保育目標「友達と仲良く遊ぶ子ども」

【分析手順1】 子どもが友達と仲良く遊ぶ”ということは、どういう姿なのかを明らかにする。

○ 2人遊びの場合

2人の子どもが仲良く遊ぶということは、次のような条件が成立している時であると考えられる。

- ① 2人が共通の目標を持っている。
- ② 相互に自分の思ったことを、相手に正しく伝えることができる。
- ③ 相手の要求を時には受け入れ、時には拒否したりすることができる。
- ④ 相手の要求と自分の要求との良い点を少しずつ取り入れて、新しい提案ができる対等な関係にある。

<考察>

○ 表面的に見て、仲良く遊んでいるように見えても、一方が相手のいうとおりに行動しているような関係は本当に「仲良く」遊んでいる姿とは言えない。

○ 相手の要求を拒否できるということは、望ましい友達関係が成立するための重大な関門というべき現象である。自分の要求が拒否されることによって、自分の思うようにならない相手が存在することがわかるようになる。

そして、自分の要求が阻止されるという体験から、自分の要求を全部充足するのではなく、相手の要求も部分的に充足しようとする“知恵”を身につけるようになる。

【分析手順2】 子どもが対等な関係で遊ぶことができるための条件を明らかにする。

○ 2人の子どもが仲良く遊ぶことができるためには…

- ① 2人の子どもがそれぞれにその遊び方の内容をよく理解している。
- ② 2人の子どもがそれぞれにその遊びに必要な技能を身につけている。

<考察>

○ 一人一人の子どもが遊び方をよく理解していなければ、相手のリードに従って遊ばざるを得なく、それでは対等な関係での遊びにはならない。

○ “友達と仲良く遊べる”ようになるためには一人一人の子どもが遊び方の技能を身につけていること、即ち一人一人の子どもが自分なりに自分の考えで遊ぶことができるようにならなければいけないことを示している。

したがって一人で遊べるようになっていくことが大切である。

○ 遊び方についての理解と技能はクラス全体で行う活動や自由遊びの中で、友達の遊び方を見ることなどによって身につけることができる。

したがって無理やりに友達とくっつけてさえすれば友達と遊べるようになるというようなものではない。

○ 一人遊びをしがちな子どもには、無理に友達と遊ばせようとしないで、一人遊びを

充実させ、発展させるように仕向けることが、友達との遊びの中で自主的に遊べる子どもを育てることになり、最終的には友達と仲良く遊べる1つの資質を育てることになる。

以上のことから、「友達と仲良く遊べる子ども」を育てるには、次の2つの事項についてそれぞれのコース（目標実現に迫る目安を段階的に示したもの）があることになる。

a 対人関係

- ① 思ったこと、やりたいことが話せる。
- ② 相手の話を聞いて理解する。
- ③ 相手のことも考えて、自分の要求を全面的に充足しないで、相手の要求も部分的に受け入れるようになる。

b 遊び方の理解と技能

- ① 一人でも友達とでも遊べる遊びができる。
- ② 簡単なルールのある友達との遊びができるようになる。
- ③ ルールのあるグループ遊びができるようになる。

【分析手順3】 a. bそれぞれのコースにおける目標実現の具体的なイメージが、個々の遊びの中でどのように現れるかを考える。

○ “友達と一緒に遊べる遊びができるようになる”

例) 積み木遊び

- ① 積み木を運んでくるが、みんなが作り始めると積み木を置いてみんなの動きを見ている。…要求ができないでいる姿
- ② 友達の言うとおりに積み木を運んできたり、並べたり、積んだりする。…要求はできないが、相手の要求は受け入れている姿
- ③ 友達が並べたり、積んだりしたのを並べ替えたり、積みなおしたりする。…相手の考えを無視して、自分の要求を通そうとする姿
- ④ 友達が並べなおしたり、積みなおしたりすると、元の形にもどす。…相手の要求を一方向的に拒否する姿
- ⑤ 友達の意見を無視して、自分の思い通りにしようとする。…相手の要求を受容できなくて、一方向的に拒否する姿
- ⑥ 友達が並べたり積んだりしたのに、自分の考えを言って作業を進めようとする。…相手のことを考えて、要求することができる姿
- ⑦ はじめから「こうしようよ。」とお互いに意見を出し合いながら作業を進める。…相手の要求と自分の要求とを調整しようとする姿

上記の遊びは遊び方の理解と技能の①の段階に当たるが、最終的には⑦の“はじめか

ら「こうしようよ。」とお互いに意見を出し合いながら作業を進めていく”というように関係ができあがるようにしていくことが必要になる。このようにして“友達と仲良く遊べる”という目標を実現することになる。

このような方法で保育目標の分析を行うことによって“保育課程”の中に取り上げた“ねらい”や“内容”のそれぞれについて、「保育目標が実現された子どもの姿と、そこに至る子どもの姿」を明確にしておくことが、保育目標の具現化に直結する大切なこととなるのである。

iii. 子どもの発達過程の捉え方はどのようにすればよいだろうか。

それぞれの保育所において、自園の保育目標の実現を目指し、保育課程を編成し、実施するに当たっては、子どもの発達の各時期に展開される生活に応じて、具体化した“ねらい”や“内容”を適切に設定することが大切になってくる。

そのためには a. 子どもの発達過程を的確に捉え、それぞれの発達の時期に子どもがどのような経験をしていくのか、また、 b. 保育所における保育目標の実現をはかるには教育期間の全体を通してどのような指導をしなければならないのか、保育所保育指針で示す事項に基づいて明らかにしていくことが大切になってくる。

そこで、次回、子どもの発達過程を見通し、それぞれの時期にふさわしい具体的なねらいや内容を理解し、またそれを踏まえ、どのように発達を捉えていったらよいか、そして「計画」、「実践」、「記録」、「反省・評価という一連の保育の流れの中で、次の保育課程の編成に生かすとはどういうことかについて触れたい。

Ⅲ. まとめ

保育所は戦後から現在に至るまで、小学校就学前の子ども達を育む場として幼稚園と同じようにたくさんの役割を果たしてきた。それにもかかわらず、幼稚園は「学校」、「教育」…と捉えられ、保育所は子どもを預かってもらう、まさに養護の部分のみがクローズアップされて捉えられてきた。しかし、今回の改定においては今までのガイドライン的な役割であった保育所保育指針が厚生労働大臣により告示となり、社会的に保育士の果たす役割は大きく、時代の変化とともに認められるところとなった。また保育所が知識や技術をもった保育の専門家のいる地域の財産として機能していることは大変喜ばしいことである。時代の変化を敏感に察知し、地域性や保護者のニーズなどにも応えていながらも、養護を基礎に教育がなされていることを頭に置き、日々の保育が充実していくことが大事である。

IV. 引用文献・参考文献

- | | | |
|--|-----------|------------|
| 1) 保育所保育指針 厚生労働省（平成20年告示） | フレーベル館 | 平成20年 |
| 2) 保育所保育指針解説書 厚生労働省 | フレーベル館 | 平成20年5月13日 |
| 3) 幼稚園教育要領 文部科学省 | フレーベル館 | 平成20年 |
| 4) 幼稚園教育指導書増補版 | フレーベル館 | 平成10年 |
| 5) 幼稚園教育要領（平成10年12月）・保育所保育指針（平成11年10月） | チャイルド社 | |
| 6) 幼稚園教育要領解説 | フレーベル館 | 平成20年10月 |
| 7) 新保育所保育指針を読む〔解説・資料・実践〕 | 全国社会福祉協議会 | 平成20年 |
| 8) 保育用語辞典第4版 | ミネルヴァ書房 | 平成20年4月20日 |
| 8) 教育課程とその構成 | | 平成5年7月 |
| 9) 保育を創る8つのキーワード | フレーベル館 | 平成20年8月 |